０５／０８／０７　　礼拝メッセージ　　ゲーリー・タカハシ牧師

主　　題：対比に学ぶ
聖書箇所：ピリピ人への手紙　３章１７節－４章１節

今日、私たちが学ぼうとしているメッセージのタイトルが「対比に学ぶ」とつけられているのは、このパウロの手紙を通して、霊的リーダーの特徴、偽りのクリスチャンの特徴、真のクリスチャンの特徴というのを皆さんといっしょに考えて行きたいからです。今日の箇所を読んでください。

☆霊的リーダーの特徴　　１７節

１．私を見習う者になってください

１７節は**「兄弟たち。私を見ならう者になってください。」**ということばで始まります。このパウロの励ましのことばがもっている意味は、「どうぞ皆さんが一致して見習う者となりましょう」ということです。パウロはここでピリピの教会の兄弟姉妹たちが一つとなって、パウロの示している模範にならう者となるように励ましているのです。けれども、その模範とはどのようなものなのでしょう？そのことはもう少し後で見たいと思いますが、まず、この１７節で**「見習う」**ということについてパウロが何を言っているのが考えたいと思います。その前に、一つ皆さんに確認していただきたいことは、パウロが**「私を見習う者になってください」**と言うのは、決して自分が他の人より優れていると高慢になって言っているのではないということです。それは、まず初めに**「兄弟たち」**と呼びかけ、ピリピの信徒たちが自分と同等の者であることを言っていることからも分かります。また、同時にその後で**「また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」**と言い、パウロ自身が実際にその場にいないために、パウロ自身を手本にすることが難しいことをよく分かっていたゆえに、自分と同じ歩みをすでにしている人たちに目を留めなさいと言うのです。この「目を留める」ということばは、ある特定の人、物に一心に目を向ける、注目するという意味で、それは、その人を見習うためにそのようにするということです。このことばには、細かい注目、また、しっかりそれを見据えることという意味があるのです。この１７節で言われていることは、私たちを模範として歩んでいる人たちにしっかり目を留め、その人たちを観察し、その人たちの歩みを実際に行なって行きなさいということです。このように記されているのは、ピリピ教会にはもうすでにパウロやその同労者たちを手本としてしっかり歩んでいる人たちがいたということを私たちに教えるのです。

ここで言われている**「私たち」**ということばには、パウロとテモテ、エパフロデトが含まれているのです。ですから、この三人の人たちが私たちにどのような模範を残しているのか簡単に見てみましょう。

テモテ＝彼のことは、テモテについて語られている箇所、ピリピ２：１９－２３に見ることができます。**「しかし、私もあなたがたのことを知って励ましを受けたいので、早くテモテをあなたがたのところに送りたいと、主イエスにあって望んでいます。:20 テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもいないからです。:21 だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。:22 しかし、テモテのりっぱな働きぶりは、あなたがたの知っているところです。子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕して来ました。:23 ですから、私のことがどうなるかがわかりしだい、彼を遣わしたいと望んでいます。」**。なぜ、テモテが見習うべき模範としてここで教えられているのでしょう？２０節を見て分かることは、テモテはパウロと同じ心をもっていた、同じような思いをもってその働きをしていた人で、ピリピの人たちのことを心から気遣い心配していたことです。２１節で記されているように、テモテは自分自身のことを考えるより神のことをより気遣っていたこと、それが２０節で言われていることの原因だったのです。また、福音が広がって行くようにと、その働きを彼がしっかり行なって行くことによって、彼がどのような人物であったのかということが証明されていたことが２２節で記されています。別の言い方をするなら、テモテは自分のことより神のことがらにより関心があったということです。他の人たちがどのように成長して行くのか、どのように神に知られ、また神を知って行く者になるのか、そのためにテモテは一心に働きを為していたのです。彼は模範とされるべき価値があり、そのような存在だったのです。

エパフロデト＝２番目の模範はエパフロデトです。彼については続く２５－３０節に記されています。**「しかし、私の兄弟、同労者、戦友、またあなたがたの使者として私の窮乏のときに仕えてくれた人エパフロデトは、あなたがたのところに送らねばならないと思っています。:26 彼は、あなたがたすべてを慕い求めており、また、自分の病気のことがあなたがたに伝わったことを気にしているからです。:27 ほんとうに、彼は死ぬほどの病気にかかりましたが、神は彼をあわれんでくださいました。彼ばかりでなく私をもあわれんで、私にとって悲しみに悲しみが重なることのないようにしてくださいました。:28 そこで、私は大急ぎで彼を送ります。あなたがたが彼に再び会って喜び、私も心配が少なくなるためです。:29 ですから、喜びにあふれて、主にあって、彼を迎えて**

ください。また、彼のような人々には尊敬を払いなさい。:30 なぜなら、彼は、キリストの仕事のために、いのちの危険を冒して死ぬばかりになったからです。彼は私に対して、あなたがたが私に仕えることのできなかった分を果たそうとしたのです。」。このエパフロデトに関して驚くべき事実は、彼が余りにもキリストの働きを為したいと願い、それを実践していたことで、その働きの最中にいのちを落としそうになったことです。別の言い方をすると、彼が余りにもキリストの働きに没頭していたがゆえに、自らのいのちを失ってしまうという、そのような状態にまで陥っていたということです。これは、パウロがこの手紙の冒頭でピリピの人たちに対して語った、そのことばと同じ態度をまさに身をもって示したものです。パウロが言ったのは**「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」**（１：２１）でした。彼は自分のいのちよりもキリストのほうが大切だと言って生きたのです。それゆえに、彼もまた私たちが模範とするべき人物なのです。

パウロ＝最後に私たちはパウロの模範を見ます。いったいパウロの何をピリピの人たちは見習うべきだったのでしょう？パウロはこの手紙を獄中で書きましたが、そのような状態にあっても彼が落ち込んでいたり落胆していたという、そのような姿をこの手紙の中に見ることはありません。事実パウロは１：１２で**「さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。」**と言っているように、今自分の置かれている状態が、彼が伝えようとしている福音を前進させるものであるゆえにすばらしいものであるという、そのような理解をこの手紙を書いているときにもっていたのです。続く１３－１４節で記されているように、なぜ彼が投獄されていたのか、それは彼が熱心に福音を語っていたからという事実がそこにあったのです。**「私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。」**。けれども、パウロは自分自身の自由、拘束されていないその自由よりも、福音が前進することを選択したのです。しかも、そのような状況の中でパウロは４：４で言うように**「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」**と、ピリピの人たちを励ましたのです。また、１７節の文脈を見るとき、パウロは自分がもっている唯一の願い、すばらしい神からの栄冠を得たいということのために、このような人生を歩んでいることを教えています。それゆえに、ピリピの人たちはパウロが彼らに示したパウロ自身の人生のすべて、態度と行動、その生き方を見習わなければいけないと言っているのです。

このことに関していくつかのことを皆さんに話したいと思います。確かに、私たちの周りにはパウロ、テモテ、エパフロデトは今いませんが、彼らと同じように一つの目標に向かって一心に走っている、そのような人はおられるでしょう。私個人にとって、チャールズ・W・スミスという先生は、生き方においても、またその死に方においても、この方以上に私の人生に大きな影響をもたらした方はいないということができます。彼は私が出会ったあらゆる人たちの中で最も聖書のみことばに精通していて、それだけでなく、その知識をしっかりとその生き方によって現わしておられる方でした。私は先生がすべてが順調に行っているときに神をほめたたえるその姿を見ましたし、また、４１年間連れ添った彼の妻が亡くなったときも神をほめたたえる姿を見ました。また、彼自身がガンで死んで行こうとするその最中にあって、自分の財産のことを託し、家族、友人たちに十分なあいさつをして最後に別れて行くことができることに感謝をして、神をほめたたえていたその姿を見ました。私にとってこの先生のことを考えない日はほとんどありません。もし私自身、この先生が生きられたその人生の半分ほどの生き方ができるとするなら、きっと神は私の生涯を見てすばらしい人生を生きたと言ってくださるのではないかと思っています。みことばは、皆さんの周りにいる人たちの個人的な特徴をまねしなさいとは教えていません。けれども、神の前の敬虔な行動を模範にしなさいと教えています。皆さんが尊敬する方たちの人生を研究してみてください。そして、なぜ彼らが神の前に敬虔な者として立っているのか、そのことを学んでください。皆さんの周りに、この教会にもそのような方がいらっしゃるでしょう。いったい彼らはどのように自分たちの生活を秩序立ったものとするのでしょう。彼らはどれほどの時間を、みことばを読み祈るために費やしているのでしょう？いったいどれだけの時間を他の人々の働きのために費やされているでしょう？いったいどのようにして彼らはみことばを彼らの人生のすべての場面において適用しようとしているのでしょう？それに加えて、これまでの歴史の中で生きて来た偉大なクリスチャンたちの人生を学んでください。それこそがクリスチャンの伝記の偉大な価値です。

２．<u>霊的リーダーはその定義において彼らの人生が他の人に模範とされるべきものである</u>

霊的リーダーというのは、一瞬の迷いもなく自信をもって私に見習いなさいと言うことができる人でなければいけません。そうでなければその人は霊的リーダーであるべきではありません。あなたは霊的リーダーでしょうか？あなたの人生は他の人の模範となるものでしょうか？皆さんは心から他の人たちに向かって「私を見習ってください」と言えるでしょうか？私がこの質問を皆さんにするときに、それ

は単に教会のリーダーの方々に対してではありません。これはまた、夫たちにも向けられているのです。なぜなら、彼らは家庭においての霊的リーダーだからです。また、これは教会に来ているすべての人に向けられている質問です。なぜなら、他の人たちを導く責任が皆さんにもあるからです。霊的リーダーの特徴を見てきましたが、次に、偽りの信者たちの特徴を見て行きましょう。

☆偽りの信者たちの特徴　　１８－１９節

１８節に**「というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。」**とあります。この１８節が書かれている理由は、このピリピの教会の中に、パウロたちが示した模範とはちがう、別の異なる模範を示している人たちがいたという、その危険のゆえに、このような忠告が与えられているのです。この人たちはいったいどのような人だったのでしょう？口では私はクリスチャンであるという告白をしていながら、その生き方はその告白とは異なる、そのような生涯を送っている人々のことです。彼らは口ではキリストを信じているクリスチャンだと言っていても、神の命令、神の規則を全く無視しているような人生を送っている、そのような人たちです。この「歩み」ということばがここに加えられて強調されているのは、彼らが信じていることが間違っているということではなくて、彼らが生きているその生き方が正しくないことを現わそうとしているからです。パウロはここで**「涙をもって」**ということばを使っています。涙を流すような感情的な思いをパウロ自身がもっていたのは、きっとこの人たちが以前、パウロがいたときに、私はクリスチャンであるという告白をもっていながら、その後になって、彼らのその告白が正しいものではなかったということを、その歩みによって証明していたからでしょう。実際に、これらの人々が**「十字架の敵」**という表現をもって語られているのは、彼らがそれまでにどのようなことを教えていたとしても、どのような告白をしていたとしても、どのようなことを言っていたとしても、彼らの人生が今このときに、キリストの敵として、神の前に正しくない者として歩んでいることが証明されていったからにほかありません。このことについて、もう少し詳しく話します。

１９節を見てみましょう。そこに**「彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」**と記されています。パウロはこの１９節から、彼らの最終到達地点がいったいどういったものなのか、また彼らの特徴が何なのかということを教えています。四つの短いことばを通して、彼らのもっている神学、彼らのもっている特徴がどのようなものかをパウロは教えているのです。

十字架の敵として歩んでいる者の特徴

（１）彼らの最後は滅びである

彼らの最終到達点は彼ら自身が十字架の敵としてキリストの敵として歩んでいることによって永遠の滅びである、ということを教えています。皆さんの周りにも、私はクリスチャンであると告白していながら、また、教会のリーダーになっていながら、その後に、自分自身の人生を通して、彼らがその告白が間違っていた、偽りであったことを証明している人たちに出会うことがあるかもしれません。私自身もこの方は間違いなく救われていると思っていた何人かの人たちが、その後、彼らが神に喜ばれない人生を送ることによって、彼ら自身がキリストの敵であることを証明したことを知っています。また私は、その正しい神学をしっかり言うことができる、クリスチャンであると告白している人たちを多く知っています。けれども、彼らは教会に来ようとはせず、彼らの人生は彼らが信じているみことばとは正反対の、そのような人生を送っている人たちを知っています。これが根底にあることです。皆さんは「私はクリスチャンである」と口で言うことはいくらでもできます。けれども、皆さんがどのように生きるかという、その生き方が皆さんの告白が本物であるか、偽物であるかを明らかにするのです。マタイ７：２１にイエスが**「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」**と言われているとおりです。

（２）自分の欲（腹）を自分の神とした。

この「腹」というのは私たちの肉体の食欲の基になっている部分ですが、パウロはこれを比喩的に使って、人々の肉的な欲望を指しているのです。自らの欲望をしっかりコントロールするのではなく、この十字架の敵と言われる人たちは、自分たちの欲望に身を投げ出して、心からそれを求めて進んで行く、そのような人たちだと言います。自分のからだを聖霊の宮として神を礼拝するために捧げるのではなく、自分自身を満足させるために、自分の欲望を得るため、快楽を得るために自らのからだを用いようとする、そのような人物だったのです。この箇所は私に、以前いっしょに仕事をしていたある同僚のことを思い出させます。彼らは私はクリスチャンだと言いながら、マリファナを吸ったり、酒に酔ったり、淫らな人間関係をもったりするような人物でした。彼らはたとえそれがどのようなものであっても、自分の肉体、自分の欲望を喜ばせるものであるなら、喜んでそれをするような人たちです。けれども、神の

恵みをほんとうに体験した人たち、神の恵みを正しく知っている人たちというのは、そのような行動、生き方をして行くことはありません。

（３）彼らの栄光は彼ら自身の恥である

恥と捉えられるべきことに彼ら自身が誇りを抱いており、そして、この恥の中には人々から蔑まれるようなあらゆること、特に性的なことがらが含まれています。彼らが栄光と考え、また、彼らが誇っていたことというのは、彼らが自らの欲望を満たすためにしようと思っているあらゆること、しかも、それをキリストのゆえに行なうと彼らが勝手に考えて行なっていたことが含まれるのです。これは、たとえばＩコリント５章に出てくる、パウロが責めた人物のようであると考えることができます。その人は自分の母親と性的関係をもって、しかもそれを、キリストの名のゆえに行なっていた、そのような人物だったのです。５：１**「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。」**。多くの人たちは現在、残念ながら、キリストを救い主であると言いながら、性的に堕落した生涯を送っています。それは、うまく合算しないものです。それゆえに、ここで記されている皮肉に目を留めてください。彼らは本来恥とするべきことがらを誇り、栄光だと考えたのです。

（４）彼らの思いは地上のことだけ

この「地上のこと」ということばは、一時的な、過ぎ去ってしまうことがら、そのようなことを現わすときに使われます。それは永遠に続く、天にあることがらと対比してここで使われています。簡単に、別の言い方をするなら、この地上のことがらに対して私たちが思い続けるという、そのような罪深い思いのことを指しているのです。この地上のことがらに、その物的なことにだけ私たちの思いが留められている、そのような状態を表しているのです。彼らの思いやその行動はこの地上にある罪深いシステムの中にあって確立されているものなのです。彼らは自分たちのあらゆるものを、過ぎ去ってしまう、永遠の価値がまったくない、そのようなものに費やそうとするのです。いったい、この地上のことだけに思いを留める人たちにとって重要なこととは何でしょう？私たちは彼らにとって重要でないことが何かをよく知っています。それは福音を広めて行くことではありません。他の人たちのために働くことではありません。教会の働きに加わって行くことでもありません。宣教でもありません。みことばや祈りのために時間を費やすことでもありません。つまり、地上のことに思いを留める人たちにとって大切なことは、今挙げたようなことではなくて、この地上を生きている未信者が大事だと思っていることと全く同じだということです。そのことがクリスチャンとどのような関係にあるのか、どうぞ考えてください。もし私たちが地上のことに思いを留めて生きるとするなら、私たちは未信者を模範として歩んでいるのです。学生の皆さんにこのことを言わせてください。もし皆さんが学校で優秀な成績を収めたいとそのことに思いを一心に向けていることによって、教会のことや様々な働きや神に関することがらを怠けるとするなら、皆さんは地上のことに思いを向けているのです。他の皆さんにもこのことを言わせてください。もし皆さんが自分の仕事に、そして、そこからどれだけの収入を得ることができるかということに思いを向けるとするなら、皆さんの思いはこの地上のことだけに向いているのです。もし、皆さんが自分の人生がどのように豊かになるのかということに思いを向けていて、それが神の御国が広まって行くことに思いを向けること以上のものを求めているなら、皆さんの思いは地上のことだけに向いているのです。もし、皆さんにとっての最大の喜びが、たとえばゴルフをしたりとか、自分を喜ばせるあらゆることを行なうことであるとするなら、皆さんの思いは地上のことだけに向いているのです。この地上のことだけに思いを向ける者は、神のみことばを学び、それを思い巡らすことのない、そのような人生です。

☆ほんとうのクリスチャンの特徴　　２０－２１節

２０節に**「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」**とパウロは記しています。

（１）思いは天にある。

クリスチャンは肉体的にはこの地上で生活していますが、この世のシステムに基づいて生きているわけではありません。私たちクリスチャンは天の国籍をもっているゆえに、地上のルールに従って生きるのではなく別のルールをもって生きているのです。私たちはこの地上での生涯を過ぎ去るものとして生きていますが、永遠のときを天において過ごすのです。私たちの国籍は天にあるという、ほんとうのクリスチャンはそのような特徴をもっているだけでなく、

（２）待ち望んでいる

主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを持ち望むという、心からの希望です。この「待ち望む」というのはすべてのクリスチャンがもっている、イエス・キリストがいつの日か再び必ず帰っ

て来られるという、そのことに対する希望です。これは単に、私たちの頭でそのことが起こるということを知っていればいいというのではなく、実際にこのことを心から待ち望み、願い求めているものであるはずです。もし、私たちの思いが天に向かっているなら、私たちはこの地上のことに思いを残すのではなく、早くこの地上から解放されたいという、そのような思いをもって生きているはずです。皆さんが世的であるかないかという一つの秤は、皆さんが空中再臨ということを聞いたとき、恐れを抱くのか、心からの興奮を覚えるのか、それとも、それが何かを中途で終わらせてしまうという残念な思いにさせるのか、それによって測ることができます。もし、恐れを抱いているとするなら、皆さんが今このときに何か神の前に罪を犯していて、そのために救いの確信が奪われているかもしれません。または、ほんとうは救われていないのかもしれません。どちらにしても、霊的にふさわしいところにはいないのです。もし、皆さんがイエスさまに私がこのことを終わってからやって来てくださいと言って、そのような中途で終わってしまうのはいやだという思いをもっているなら、皆さんの思いはこの世に向かっています。もし、空中再臨が皆さんの心を感動と喜びに満たすとするなら、皆さんの心は天に向いていることがよくわかるでしょう。キリストの再臨に対する心からの待ち望みというのは、私たちクリスチャンの心の中にあって、私たちをきよめる働きを為してくれます。そして、それは私たちクリスチャンが様々な誘惑やこの地上でのことがらに捉われることから私たちを守ってくれるのです。

２１節に関して多くのことを言う時間がありませんが、このことだけ言わせてください。**「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」**と、ここで言われていることは、キリストがやって来られるそのときに、私たちのからだ、その内側が、そのすべてが完全にキリストに似たものへと変えられるという、そのことが教えられているのです。内側も外側もキリストのようになるのです。私たちは神にはなりませんが、神がもっておられる特徴を私たちももつようになるのです。また、神の栄光を私たちも分かち合うことができるのです。

４：１を見てください。**「そういうわけですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。どうか、このように主にあってしっかりと立ってください。私の愛する人たち。」**。私たちが見てきたことに基づいて、パウロはこの最後の励ましをピリピの教会の人たちに与えるのです。最初にパウロは、神の前に敬虔な人々を見習いなさいと言いました。２番目にパウロは、偽りの信徒たちに対する警告を与えました。そして３番目に、ほんとうの信徒として彼らの国籍はどこにあるのか、彼らがどのような希望をもち、そして、その希望がどのような変化を私たちにもたらすのかを教えていました。そして最後に、それらのゆえに「しっかりと立つ」ようにとパウロは励ますのです。パウロがこの「しっかりと立ちなさい」という表現を使うとき、パウロはそこで霊的にしっかり立っていなさいという意味で使っています。動かされることのない、そのような霊的状態でありなさいと。聖書以外の文献の中で「しっかりと立つ」というこのことばは、勇気ある者、勇気ということばを指して使われ、それは非常に激しい戦場の中で与えられている場所を、どんな危険があっても動くことなく勇敢に戦う戦士の姿を表わして使うことばです。

１：２７でパウロはピリピの教会の人たちに対して、彼らがどのような迫害を受けていたとしても、福音のためにしっかり立っていなさいという励ましを与えました。**「ただ、キリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、」**と。そして、ここでパウロはこの真理のゆえに忍耐をもってしっかりと立っていなさい、キリストとの一致が彼らにあるゆえにしっかりと立っていなさいと言うのです。

これが皆さんに語りたい最後のことです。私たちはクリスチャンとして日々の生活の中で様々な困難、または意識が他のことに向いてしまうような状態が起こります。私たちはそのような中で、いったい自分がだれなのか、また私は何に献身しているのかということをしっかり覚えておかなければなりません。他のことがらに思いが向いてふらふらしてしまうような、そのような人生の原因は、私たちが間違ったものに目を向けているか、間違った人を模範にしているか、そのことによって起こされるのです。もし、私たちが今日学んできた真理にしっかり立つことができるなら、私たちは天のことがらにしっかり目を向けて歩んで行くことができるでしょう。